OPINION
私はこう考える

大山光春（財）交通事故総合分析センター研究部研究第一課研究員
平成18年3月から現職。主な業務は、交通事故統合データベースにもとづく交通事故の分析研究および各機関依頼による受託調査研究。『月刊交通』（東京法令出版）の平成18年12月号、19年1月号、3月号、5月号にて「子どもを交通事故から守る―統計分析から学ぶ効果的な交通安全教育」を連載中。

子どもの交通事故統計を新たな切り口で分析

平成17年に歩行中・自転車乗用中に交通事故に遭い、死傷した子ども（15歳以下）の数は、5万6366人に上る。15年前の平成2年は5万6620人と、多少の変動があるものの、ほぼ横ばい状態が続いている。子どもの人口が減少しているにもかかわらず、死傷者数が横ばいということは、子どもが交通事故に遭う確率が高くなっているということを意味する。

学校、警察、保護者と、これまで関係者が一生懸命に子どもの交通事故防止に取り組んできたのに、その成果が数字に表れていないのはなぜか。大山さんが『月刊交通』の平成18年12月号から連載している「子どもを交通事故から守る―統計分析から学ぶ効果的な交通安全教育」というレポートは、そんな問題提起から始まっている。

過去に行われた数々の調査分析から、子どもの事故には「小学校低学年は歩行中に事故に遭うケースが多い」「事故の発生時間は登下校時間帯に集中している」「幼児、小学校低学年は自宅から100m以内で事故に遭うケースが多い」などの特徴が解明されている。「こうした成果を、いかに現場の事故防止対策に活かしていくかが課題」と、大山さんは語る。「子どもの事故といっても、小学校1年生と6年生では特徴が異なります。交通事故統計をもっと深く掘り下げていけば、学年別など一点集中型の交通安全対策に活かせるような、特徴あるデータが得られるのではないかと考えました」。

自転車事故死傷者数は高校1年で増加

まず大山さんは、平成15年から17年までの3年間、歩行中に交通事故に遭い、死傷した子どもの事故について分析を行った。

歩行中の事故による死傷者は、小学校低学年（1～3年）が最も多く、子どもの事故全体の46％を占める。小学生全体では5月と10月にピークがあり、8月と1月が極端に少ない。この傾向は1年生で強い。時間帯では登下校時に事故が集中し、特に小学校低学年、とりわけ1年生の事故が目立つ。法令違反では子ども側の「飛び出し」による事故が多く、事故事例を見ると「小学校低学年の子どもは、まったく安全確認をしないで道路に飛び出していくという特徴がある」という。

こうした分析結果から、大山さんは「小学生における事故防止対策のカギは小学1年生。親や教師の言葉を素直に聞く年頃でもあり、この時期を逃さず交通ルールを教えれば、効果は大きいのではないか」と提案する。

また、小・中・高校生の学年別の自転車事故の分析では、死傷者数が高校1年で増加することが明らかになった。自転車事故死傷者数（自転車が関係する交通事故によって生じた死傷者数）の平成7年から17年の累計を学年別にみると、高校1年生の死傷者数は、中学3年生と比較して2・7倍という数字が出たのだ。通学の手段として自転車を利用する生徒が増えることが要因としてわかっているが、大山さんは、高校1年での増加があまりにも多すぎることに驚いたそうだ。「高校入学後に自転車の乗り方指導を集中して行うなど、早い段階で手を打つことが必要です。中学校と高校が連携して、高校入学前にも安全指導ができれば、効果が上がると思います」。

さらに、子どもの自転車事故死傷者を都道府県別にみると、県によって差があることも明らかになった。「事故の少ない地域に学ぶだけでなく、警察署単位で、地域の子どもの事故の特徴を改めて把握し、その地域に適した方策を探っていくことも必要です」。

先生や保護者のパトロール、街頭指導においても「この地域では最近こんな事故が多いので、こうした対策を行っていると理解してもらうことが大切。危機感を持ち、関係者が一丸となって取り組めば、良い結果につながるのではないでしょうか。今回のレポートがその一助となればうれしいですね」と大山さんは話す。

VOICE
読者の声

ご愛読者の皆様へ：SJに対するご意見・ご感想をお寄せください！
SJ編集部では今後の紙面づくりの参考にさせていただくため、日頃よりご愛読いただいている読者のみなさまのご意見・ご感想をお待ちしております。SJへのご意見・ご感想は下記のメールアドレスへ。
sj-mail@ast-creative.co.jp　※弊紙に対する個別のご質問には回答できかねる場合がございます。あらかじめご了承ください。
※調査協力等のためにご連絡をさせていただく場合があります。

★今月号のVOICEは、10月4、5日に開催される、「第7回全国自動車教習所教習指導員安全運転競技大会※」に出場される教習所の方の声をうかがいました。

大会に参加することで、より高いレベルの技術力を身につけたい

菅野利昭さん（鹿児島県）玉里自動車学校

全国自動車教習所教習指導員安全運転競技大会の二輪部門に今年初めて出場します。自分の運転レベル向上のために、この大会の競技内容を真似て、以前から練習に取り組んできました。自分の技術がどこまで通用するのか試す良い機会なので、大会をとても楽しみにしています。

教習所に二輪の免許を取りに来られる方は、趣味として二輪を楽しみたいという方が多く、とても熱心に教習に取り組まれます。そうした教習生の意欲に答えるためには、指導する側の技術力が不可欠と考えています。大会に参加することで人に誇れるようなさらに高いレベルの技術を身につけたいと思っています。

私が指導員になって今年で10年目です。これまで先輩方から指導員としての技術や心構えをいろいろと学んできましたが、今はそれを私が後輩たちに伝えていく立場にもなっています。技術の向上はもちろんですが、指導力を磨いていくためにもこのような大会の機会を大切にしたいと思います。

教習所では、教習生に交通事故を起こさず、運転を楽しんでもらいたいと考え指導に取り組んでいます。ただ免許をもらうために教習所に通うのではなくて、教習の中で、運転の楽しさを感じてもらいたいと思っています。また、どんな場所で交通事故が多いのか、どのような運転は危ないのかといったことを知らない方がたくさんいます。交通事故を起こさないために、技術的なこと以外にも、危険予測しながら運転できるよう、アドバイスをしていきたいです。

全国トップレベルの指導者から安全運転の知識や技術を学びたい

小松智恵子さん（宮城県）加美自動車学校

全国自動車教習所教習指導員安全運転競技大会には、全国から優れた指導員の方々がたくさん参加されていると聞いています。レベルの高い走りを生で見ることにより、自分の指導に活かせればと考え、初めて二輪部門に出場することを決めました。

この大会は、教習指導員として模範となる指導力、技術を身につけるとても良い機会だと思います。良い刺激を受けて、今後の教習に活かしていきたいと思います。

また、全国から集まった指導員の方々に、生徒に対する指導方法や自分自身のレベルアップのコツなどの情報も教えていただきたいですし、特に、身近に二輪の女性教習指導員が少ないので、全国の女性教習指導員の方々との交流をとても楽しみにしています。

教習所では、高齢者講習や企業研修、交通安全の講演会などの機会もあり、免許を取得しに来た方だけではなく、再教育のお手伝いもしています。免許取得前に教習所で習ったことが、1年、2年と経つうちに「なれ」てしまい、安全運転が崩れては困ります。高齢者講習は、視力や反応の低下を再認識していただいたうえで、安全にいつまでも自動車に乗り続けていただきたいです。

新しく免許を取られる方には、技術面では四輪車や二輪車の特性を活かした走りについてきちんと伝えていくことが大切ですし、安全面では、教習所内では気づかない危険性まで伝え、免許を取ってからの公道でのより安全な運転につながるようなアドバイスを心がけています。

※全国自動車教習所教習指導員安全運転競技大会＝自動車教習所教習指導員の自己研鑽への動機づけや、他の教習所との交流の場を提供することを目的に、鈴鹿サーキット交通教育センターで2001年より毎年開催されている。詳しくは右記ホームページを参照。　http://www.honda.co.jp/safetyinfo/topics/rally_7th